

ミフタクル・アムリ氏の博士学位申請論文審査結果要旨

ミフタクル・アムリ氏の課程博士学位申請論文『インドネシア語・日本語ビジネスメールについて―「敬称」「前文」「主文」「末文」の研究―』の審査結果の要旨は以下である。

まず本論文の概要から述べる。

当論文は本文、注、参考文献を含め 125 頁からなり、論文末には Excel で整理されたインドネシア語と日本語のビジネスメール 600 通が資料として付されている。論文は 6 章から構成されている。

序章では本論文の目的と方法が述べられるとともに、インドネシア人日本語学習者のニーズ分析に基づいて、インドネシア語と日本語のビジネスメールの対照研究の意義が強調されている。

1 章ではインドネシア語と日本語のビジネスメールの敬称の使用状況が報告され、インドネシア語の表現カテゴリとして 9 種、日本語の表現カテゴリとして 7 種が指摘されている。またその敬称がメール本文中でどのように変化しているかという観点から、インドネシア語においては人間関係が比較的ダイレクトに呼称の選択に関与しているのに対し、日本語においては人間関係に比較的関わりなく儀礼的な呼称選択が行われているという、両言語メールの特徴が指摘されている。

2 章では前文における出だし表現が比較されている。インドネシア語の表現カテゴリとして 6 種、日本語の表現カテゴリとして 5 種が指摘されている。ここにおいても、相手に応じて挨拶の表現を変える傾向はインドネシア語に顕著であり、日本語メールにおいては人間関係に比較的関わりなく表現が選択されることが指摘されている。またインドネシア語メールにおける宗教的挨拶の選択要因についても考察している。

3 章では主文の前置き表現が分析されている。主文自体は、依頼、指示、報告などの行為的意味をもつものがほとんどだが、この談話構造を扱うものではなく、現在までの言語学・日本語学・日本語教育学の研究が対象としていなかった前置き表現として、サシツカエナケレバ、タイヘンデショウガ、カッテデスガ類を取り上げ、それぞれの上接部分、下接部分に着目して、表現のバリエーションを整理している。

4 章では末文の締めくくり表現を分析している。インドネシア語における表現カテゴリとして 7 種、日本語における表現カテゴリとして 6 種を認定し、複合的に使用されるパターンも抽出している。

終章においては、4 章までに明らかにした点を要約したうえで、インドネシア語メールと日本語メールの比較の総括を行っている。

以上の内容の学位請求論文につき、2015 年 12 月 19 日（土）、愛知学院大学栄サテライトセンターにおいて、口述審査（公開）を行った。

当日、各審査員から、大きく、以下の諸点について質問およびコメントが出された。

- ①データ収集方法のより具体的な説明
- ②インドネシア社会の文化的背景、および人名に関する命名の文法
- ③敬称、出だし表現、前置き表現、締めくくり表現などをカテゴライズした際の判断の根拠。
- ④敬称、出だし表現、前置き表現、締めくくり表現などをカテゴライズした結果についての、より深い意味づけ
- ⑤労いの定型表現がインドネシア語メールに出現しない文化的背景
- ⑥前置き表現の定義
- ⑦前置き表現の分類で説明に使用した発話行為のより詳しい説明
- ⑧各発話行為の状況的規定因
- ⑨その他論文中の図表の表示法

これらの諸点について、ミフタクル・アムリ氏から、おおむね審査員に納得の行く回答が得られた。また、本文の主旨に直接影響のないもので、修正が可能な部分は速やかに修正することが確約された。

本論文は、実際にインドネシアの日系企業でやりとりされたメールをデータとしている。このデータについては学外審査員からも高い評価を得られたが、一方で、送信者・受信者の人間関係についての正確な把握が難しかったことから、全体の論述が、表現形式の記述・分析に限定されている。この点が本論文の特徴であり、一方で限界であると評価される。

しかし、ビジネスメールを資料としたインドネシア語・日本語の比較対照研究として一定の成果を上げている点、今後インドネシア人学習者に対する日本語教育に資する知見を有していると認められる点から、最終的に、審査員4名とも、課程博士の学位を授与するに値するものであると判断した。

なお、ミフタクル・アムリ氏は、2014年に、学位授与要件である二カ国外国語審査（英語、日本語）に合格している。

以上の事由をもって、ミフタクル・アムリ氏への課程博士学位授与は妥当であると判断した。

2016年2月1日 主査 多門靖容
副査 蛸島直
副査 竹下修子
学外審査員 俵山雄司